

天津村江戸商人でにぎわう商都

絵と文・熱田親憲 題字・熱田泰華

紀伊・房総

くろしお物語

◇35◇

房総半島を南下する川シーワールド、誕生JR外房線の終点が鴨寺(日蓮聖人)、鯛の川駅、その手前から安浦(国指定特別天然記念物)などが観光地と続き、現代では、鴨して有名です。

鴨川市天津の浄土真人、江戸へ鮮魚やミカ宗寺院善寛寺の過去帳で、天津村に滞在したに生活用品を卸す商人な関西漁民をみると、紀州有田郡の広、栖原の輪で発展した南房州一の商業都市であった。善寛寺に残る史料の中に「先祖六右衛門従申伝事がある。摂津国西宮に先祖を持つ四位六右衛門の魚の商売ぶりが紹介されている。江戸時代に入って間もなく、六右衛門は江

形村の運輸業の四郎左衛門扱いで江戸まで船積みしてもらい、「大仲間」と呼ばれるようになった。六右衛門が連れてきた小漁船でイワシの豊漁を知り、紀州・泉州・安芸から八手網や、まかせ網を招いて大漁を続けた。しかし、イワシの干場に困り、大名の西郷氏に願い出て仲間7人分の鯛干場を二タ間浦に与えてもら

れず、80年の歴史を終えた。「先祖六右衛門従申伝事」の結びに、イワシの漁民や住民が他国出身者に比べ商機に恵まれたのは、東浦賀や江戸の干鯛問屋を通し物流を強化したからだ。(今で言うところ、ロー漁村の魚の産業化に伴って、人々の生活レベルが上がり、主従関係・帰属意識が薄

現代に通じる経営体系

戸で米屋を営む同郷の太郎兵衛により、房州船形村(館山市船形)で魚商売に成功していた時は、運上金も格別な同郷の西宮四郎左衛門を紹介され、魚商売を始めた。1618(元和4)年から丸20年、船形村でしっかり商売して元手金を作り、小漁船を引き連れて天津村に移った。天津村は漁獲が多かったが、押送船がなかったため、荷物取次納屋を設け、船門家は魚商売が続けら

った。年々豊漁が続くが、水主層の確保が難しくなってきた。00俵も生産高をあげた時は、運上金も格別な上納するほどだった。と反省点が記されている。私が思うに、これらの背景には縁故組織の後ろさや人間の傲慢さが見え隠れし、現代に通じる経営の在り方が示唆されており、100年と続かない時代の流れの速さを痛感した。

